

---

;\*: にじ ;\*:

麗奈美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

：\*：「元じ」；\*：

### 【Zマーク】

Z9268C

### 【作者名】

麗奈美

### 【あらすじ】

あの時、沙結花に出会えたことは運命だと思うよ。覚えてる？あの時、2人で見た虹キレイだつたよね！－あたしと沙結花いつまでも一緒にいれるんだと思ってたのに・・・・・

## プロローグ

あの日あたしは沙結花に出会えた」と  
絶対忘れないよ。

沙結花はいつもあたしに優しくて、

あたしは沙結花になにもお返しきれなくて・・・  
ごめんね・・・。

いろいろ迷惑ばっかかけちゃって。

沙結花は、あたしと出会えて本当に良かった?  
あたしはもう自己中だけどいつも沙結花は  
あたしを受け止めてくれた。

お互に何でも言える仲だったよね。

あたしは、そんな沙結花のこと『心友』  
だと思ったよ  
いろいろありがとう!!

## 出会い

『麗奈美～起きなさいよ。今日は入学式でしょー!』

とわたしのお母さんが寝ているわたしを起こさうとしている。

でも、わたしは起きない・・・。  
お母さんはわたしの部屋の窓を開けたら、太陽の日差しが  
パーンと窓から入つてきてわたしはまぶしくて

一度目を開けた。

『んーん・・・』

と言いました寝てしまつた。

『麗奈美！早く起きなさい。いつまで寝ているの？』

お母さんはそう言つた。

あたしは『んーん・・・ハアアア～』

と1回あぐびをして起きた。

時計を見たら『6時25分』だった。

あたしはベッドから降りて、パジャマのまま

1階に行くために階段を下りた。

あたしの家は、2階建てで横長の家に住んでいる。

1階にはお母さんだけがいた。

朝食は、トーストのパンにいちじくジャム・・・あと紅茶が用意されてる。

あたしは急いで朝食を食べた。

あたしの家族は、お父さん、お母さん、あたし、妹の麗美音  
の4人で住んでいる。

急いであたしは2階の自分の部屋に戻った。

そしてあたしは、初めての制服にそでをとおした。

少し長めのスカートもしっかりとひざ上にして、

自由の胸のリボンはピンクにし

髪は茶パツで2つにしばり左耳には輝くピアスが3つ・・・。

そして、カバンには大きなハイビスカスのかざりや  
キー ホルダーがたくさんついている。

今日から高校生！！

あたしは急いで階段を下りてリビングに行くとお母さんがいて  
お父さんがいて麗美音もいた。

『麗奈美その格好で学校行くの？！』

とお母さんが聞く・・・。

『うん！・・・？？』

『ピアスはずさなくていいの？？』

『へーきへーきッ』

と答えた。

お父さんが

『麗奈美一時間まであうのか？』

と聞く。

・・・・・

『あ、つ！！6時58分・・ヤバイ！』

と言い玄関に向かつて走る・・・

靴をはき玄関のドアを開け

『行つてきまーす！』

といつて外に出た。

## 出会い2

家から歩いて15分のところに駅がある。そこから電車にのって20分すると左側に『私立美桜高等学校』が見えてくる。

そこがこれからあたしが通う高校。

電車からおりて5分歩くと学校につく。

桜が満開のキレイな校舎

響きわたる生徒の挨拶の声・・・

学校の門まで来るとさすがに緊張した。

あたしはドキドキで学校の門をくぐつた。

学校の玄関付近に新1年生のクラスがはられている。

あたしも自分のクラスを探した・・・

1 - 1 - 青井 - 伊東 - 倉田  
1 - 2 - 和泉 - 川井 - 黒崎 -

『あっ！あったあーーー！』

思わず叫んでしまった。

そしたら近くにいた子が話しかけてきた。

『あつ・・あの～・・もしかして1年2組？？』

『うん！そうだよっ』

とあたしは言つた。

『あつ！私、黒崎 実菜つて言います。

実菜つて呼んで下さい。よろしく』

『あたし川井 麗奈美

麗奈美つて呼んでね！…』

これが実菜との出会い。

2人は自己紹介をした後にお互い違う中学からなので  
中学の時の話をしながら教室までの廊下・階段を歩いていた。

『あつ！1年2組の教室はつけーん！…』  
と実菜は言つた。

『ほんとだあー！…なんかワクワクするねつー…』

『うん！…』

2人は教室に入る・・・。  
するとそこには・・・。

あたしみたいな茶パツの子や、  
ギャル系の子がいた。

正直怖かつた・・・。

教室に入るとさっそく自分の席を探した。

『麗奈美ーーーうちらの席前後だねー』

と実菜が嬉しそうに言つ。

実菜もあたしと同じでこの高校に知り合はない。

『あつ！そーいえばさあー実菜ケータイ持つてる？？』  
とあたしは実菜に聞いた。

『うん！…持つてるー』

『じゃあーメアド交換しよオーーー』

と2人はメアドを交換していた時に・・・

『ねえーーーその茶パツーーーー』

とギャル系の子が話かけてきた。

きつと・・・・イジメられる・・・。

そう思つていた・・・。



あたしは不安でいっぱいだつた。

その時また、ギャル系の子が口を開いた。

『ねえ～！～ 悠里（ゆいり）と仲良くしない？』

あたしはすぐビックリした。

『うん！～いいよ。あたし麗奈美（れいなみ）』

と答えた。

『麗奈美ー？！悠里つて呼んでいいよーー。』

『ちやあー悠里つて呼ぶね！よろしくねーー。』

『つてか～麗奈美のダチ？？』

と今度はあたしの友達になつたばかりの実菜を指さした。

『うん。 そうだよーー。』

とあたしは答えた。

悠里は

『あんた名前は？？』

と聞いた。

『黒崎実菜つていいます。』

と実菜は答えた。

『実菜・・・よろしくねえ～！～』

とその時チャイムが鳴った。

キーン ローン カーン ローン・・・

と同時に担任が教室に入つてくる。

『おはようございます！～今日からこのクラスを受け持つ・・・』

黒板に字を書き始めた。

黒板に『高島（たかしま）奈緒子（なおこ）』

と書いた。

その後、簡単な自己紹介をした。

『私は、1975年12月18日生まれのB型で・・・』

『先生ー！！年言つちゃつていいのかよー！！』

といきなりあたしの隣の席の男子が大きい声で言った。

『おおーっ32歳ー？？独身ー？？』

と今度は実菜の席の隣の男子が叫んだ。

そしたらクラスがすごく盛り上がった。

『もおー！！じゃあ私の自己紹介終わりーっ！－みんなーよろしくねー』

すぐ元氣のある先生で

その時あたしはいい先生にあたつてよかつたあーと思つていた。

## 新しいダチ

その後、入学式がはじまった。

入学式は1時間くらいで終わり、その後下校。

あたしは、帰る方向が同じ悠里と帰ることにした。

『麗奈美ー！帰り悠里のダチもいるけどいい？？』  
と悠里が聞いた。

『うん！…いいよー』

と教室で帰りの支度をしながらみんなに聞こえるくらいの声で  
話していた。

『じゃあー麗奈美また明日ねっ今日メールするよー。』  
と実菜がそう言って教室を出た。

『麗奈美ー帰ろオー』

悠里は帰り支度を終え麗奈美の席にきた。

『うん。』

そして2人は教室を出た。

あたしと悠里は靴箱にむかつた。

そして、靴箱につくといきなり

『悠里おせえよっ！』

『待たせんなよっ！…』

『今日の帰りはドコ寄るー？？』

と3人の悠里の友達が立っていてそう言つた。

『わりいー遅れて・・・今日から麗奈美もいるけどいい？』

悠里はあたしを指差して3人の友達にそう言つた。

『悠里の新ダチ？』

1人が聞いた。

『今日仲良くなつたばつかなんだよっ』

悠里が答えた。

『あたし、おおはし大橋 つぐみよろしく』

『あたしは日向 瑞樹 瑞樹って呼べっ』

『あたしはあー水田 真理ヨローーー!!』

と3人はあたしにあいさつした。

3人とも髪が茶パツや金髪で化粧も濃くてギャルっぽかった。

『・・・麗奈美ちゃんだけー??』

と、つぐみつて子に聞かれた。

『うん!!あつ!麗奈美って呼んでいいよおー』

あたしは言った。

その後、瑞樹が口を開いた。

『じゃあー今日はゲーセンいかねえー??』

『賛成ーー!!』

5人でゲーセンに行くことにした。

## 新しいダチ2

あたしたちは、5人で初メンで初プリを撮った。

5枚撮つた。

その後、クレーンゲームでたくさんお金を使い  
気づけばあたしは2000円も使ってしまつていた。  
あたしのお小遣いは5000円でまだ今月は始まつたばかりな  
に・・・。

とその時、瑠樹が

『あーもうゲーセンあきたー次行こりつー!』  
と言つた。

『ぢやー次行こー次ー! 次カラオケ行く? !』  
と真理が聞いた。

『OK! !』

『行こう! 行こうー! !』

『行くうー! !』

と3人は答えた。

『おい! 麗奈美はあー? 行く? 行くよなあー? 』  
と悠里が言つた。

『・・・。あたし今金ないさあー・・・ごめんカラオケ、バスして  
いい? ?』  
とあたしは言つた。

『あー? ! まじかよ! 麗奈美バイトしてねえの? ?』

『うん・・・つてかうちの高校バイト禁止じゃん・・・。』

『はあー? ! マジかよオ! ! 麗奈美まじめじゃーん! !』

『うちら4人バイトしているよつ! ! 麗奈美も入るー? ?』

『あたしも入つていいかなあー? 』

『うん! ! いって。じゃあーうちら今週の土曜日にバイトあるか  
ら麗奈美も来いっ! !』

『うん！…』

あたしは、少しでもお小遣いを増やして少しでも  
楽な生活を送りたかったから、その時のおたしには、  
このチャンスを逃すわけにはいかなかつた。

バイトは学校の規則を破つていていた。

でも・・・あたしはお金に困つていたからしようがないと思つた・・  
・。

家に帰るといつも通り家族がみんなそろつて夕飯を食べていた。

『麗奈美ー！！学校どうだつた？？』

お母さんが優しくあたしに聞いた。

『いいクラスだつたし！友達もできたよー！…！』

とあたし言つた。

### 新しいダチ3

次の日・・・

『遅刻だーー遅刻うーーーーー!』

とあわてて学校の門をくぐるあたし。

『ちょっと待てーーー!』

とそこには教頭が立っていた。

あたしはイヤな予感がした・・・。

『お前、スカートのたけ短いぞつーーー!』

やつぱり・・・。

でも、あたしは、そんなにかまわずスルーした。

そしたら、教頭があたしのカバンに書いてある名前をみて

『1年2組川井麗奈美・・・次短かつたら指導だなーーー!』

あたしはムカつてきて、

『はあ??勝手にすればあーー??』

と言つてやつた。

教室につくと8時30分だった。

5分ちこくした。

『麗奈美ーおい!お前くんのおせえぞつーーー!』

と悠里が大きい声で言つた。

教壇には担任の高島が立っている。

あたしは悠里に向かつて

『遅くねえーよつーー遅刻上等ーーー!』

と叫んであたしは席についた。

後ろから

『麗奈美ーおはよう

と実菜が声をかけた。

『おはよオーフーーー実菜つーーー』

休み時間にはいつも悠里があたしの席に来るけど、  
悠里と実菜はあんまり仲のいいように見えない・・・。

『麗奈美ーー！今日帰りどつか寄つてくれ？？』

と3人でいる時によく悠里が聞いてくる。

『あたしーお金ないつて。』

あたしは答えた。

なるべく3人で話を・・と思つてあたしは答えてた

その時、悠里が口を開いた

『やーいば悠里ー実菜のアド知らないから教えてーーー。』

『うん！いいよー』

『じゃー後でアド紙に書いて渡すねーーー。』

『うんーー！ヨローつてかあー機種ドコ？？？』

『私、ドコモだよおーーー！悠里はあーー？』

『悠里はーあ』

『へえーーー！やーいばわあー悠里はプロフとか作つてる？？』

『ああーあるよーー！今日送つてやるよー。』

『氣づけばこの会話にはあたしは入つてない・・・。

2人で仲良く話してたから・・その中には ireなくて・・・

その時があたしにはこの2人はすぐ仲良しに見えた・・・。

## 仲間はずれ

『あー・・・また今日も遅刻うー？！』

と叫びながらあたしは学校の門をくぐった。

『ラツキー！今日は教頭門に立つてない！！』

とあたしは確認し走つた。

『おーい！！！待てえー川井ー！！』

あたしは聞こえないふりをしてスルーした。

『教頭なんて楽勝〜！…！』

今日は、8時20分に教室についた。

みんなが楽しそうに騒いでる。

実菜があたしに気づいて

『おおー麗奈美今日来るの早いじやん！…』

と言つた。

『麗奈美おはあー！…！』

とあたしの席に座つていた悠里が言つた。

『おはよオー！…！つてか何してんのー？？』

あたしは聞いた。

『今、プリ帳交換して見てたんだよ』

と悠里が言つた。

『ねえー悠里！このプリの変顔まじウケルー』

実菜が悠里のプリ帳にはつてあるプリを指差した。

『はあー？！それ良くなつ？？』

『このプリキモーイ！…！』

と実菜が言つて大笑いした。

2人は楽しそうに話している。

あたしはその会話には入れてない・・・。

あたしは？？

もつてられないの・・・・?

その時、悠里が話かけてきた。

おい麗奈美ー！！！話に付いてるー！！！」

以外など思つた

い、もあたしには懇意が自分さうよけれどはいいと言ふにゆくが、な人に見えていたのに全然ちがつた。

悠里は、ギャルだけどちゃんと周りを見れるいい子だつた。

ああ、今ボクとしてたみたい。  
・・

と答えた

『うふ、アーヴィングの田舎』

『ああーー!!セイウチ!!明工の朝8時!!悠里つチ家來ーー!!

『悠里の家』にある「一ノ山」

『ああー』めん。麗奈美、悠里つチ家知らないかあー・・・。

『じやあーたあー』

と2人で話してゐる時に・・

木戸の懇意な度で、手を握りに行こう。

『新編古今類聚』

悠里は言った。

『这里にハマー？？』

と次々に実菜は悠里に質問している。

あたしは実菜の書り込みにむかっていた

三人でいるのは何であたしは会話の中に入らないの

卷之二

とあたしは怒りが爆発した

みんながあたしに注目した。

その時ちょうど・・

キンコーンカーンコーン・・  
チャイムが鳴つて高島が教室に入ってきた。

## 実菜とのけんか

その日は一日中実菜と話すことになかった。あたしは休み時間、一人で読書をしていた。

あたしはそれでもいいと思った。

あたしが悪いわけじゃないんだし・・・。

けんかして誤らなければそれで友達の縁が切れるんだ・・・。

友達なんてそんなもんだとと思っていた。

でも・・・

『おいーー麗奈美ー何クヨクヨしてんだよッー!』

と悠里の声がした。

振り返ると悠里が一人でいた。

この教室にはあたしと悠里だけがいる。

『悠里! 何で? 実菜と一緒にだつたんじゃないの? ?』

『んー・・悠里も実菜とけんかしたあーー!』

あたしは驚いた・・・。

けんか? 悠里と実菜が・・?

あたしは聞いた。

『どうして? ?』

『悠里ねえーあの性格嫌いなんだよーー! しつこいじゃんー!』

と悠里は言った。

けど・・あたしは何か違う理由があると思った。

多分・・・悠里はあたしのために実菜とけんかしたんだと思つた。

そして、あたしと実菜はけんかしたまま1日が終わつた。

土曜日悠里とつぐみと瑠樹と真里と一緒に悠里たちのバイト先に行つた。

そこはフツーのパン屋だった。

あたしも今日から働くことに決めた。

レジの仕事をやつたり品をならべたり・・・

このコンビには人がよく来るので1日がすごく大変だった。

午前9時から仕事してもう午後5時だった。

と、そんな時、女人の人が店に入ってきて、

『悠里、仕事おつかれ〜！！次うちらが変わるよ〜！』  
と言つて店のおくの部屋に行つた。

『じゃーみんな今日は帰るかあーーー！』

と悠里が言つた。

『うん。』

5人は店を出た。

次の日、あたしが起きたのは、夕方の5時だった。

『あたし・・・こんなに寝ちゃつたんだ・・・。』

今日はすゞくルーズな1日だった。

いつもとはちがつてメールも今日は1通もこない。

あたしは、ベッドからおりて、何をするのでもなく

ただボーッと自分の世界に入つていた。

くそーいえば明日は学校かー・・・

実菜と顔あわせるのイヤだなあーッ・・・

席、前後つてありえないーつ・・・>

ただあたしは、そんなことを考えていた。

## 実菜とのけんか2

『・・・え・・・ん！』  
『・・・え・・・ん！』

『おねえちゃん！ もオ - 学校遅れてもしらないよつ - .』

そう言つたのは、妹の麗美音れみねだつた。

『えつ？！ もう朝？！』

と、言つてあたしは起きて学校へ行く支度をした。

『あー もお 6時50分じゃんつ！ - .』

急いで制服に着替え朝食をとらず家を出た。

ギリギリセーフで電車に乗れた。

車内であたしは、知り合いがいなかキヨロキヨロしていた。  
そしたら、美桜高のあたしと同じ制服を着た

見覚えのない女の子があたしを見ている。

あたしは気になつたから、その子の所に近づいた。

そして、あたしはその子に聞いてみた。

『あの～・・・となり座つてもいいですか？』

『はいっ！ ビーぞつ。』

と、その子は答えた。

『あのお・・・同じ高校ですよねつ？』

『はい！ そうですっ！ - .』

その子は答えた。

しばらくすると、学校が見えてきたあたしはその子と電車をおりた。  
お互たがい名前を知らない同士。

あたしは・・・先輩だといいなあーと思つていた。

とても優しい人だつた。

学校の門をくぐると、その子は

『今日一緒に学校に来れて良かった！！ ありがとう 川井さんつ！ - .』  
と、言つて走つて行つてしまつた。

『何で　あたしの名字を知つているんだ・・・？！』

あたしは考えていた。

そこにつぐみが来た。

『麗奈美っ！おはよーっ！朝、会うのは初だねっ！』  
と言つた。

『うん。そーだねっ！…つてかーあー悠里は？！』

『うん・・・？！あいつ多分遅刻じやねえー？！』

『そーなんだあー』

『つてかあー麗奈美ンちクラスに入学式ん時学校来てねえ奴いねえ  
ー？！』

『うーんっ？！いたかなあーそんな子つ？？！』

『知らねえーの？！クラスのメンなのにつ？！』

『うん・・・。』

『そつかあー。』

と話しているうちに靴箱についてた。

靴をぬいでうわばきにはきかえる。

『麗奈美ちゃん・・・？！おはようつー？！』

その時、つしろから声がした。

## 実菜とのけんか③

振り向くとそこには、実菜の友達が立っていた。

『おはよーっつ！…』

あたしは、元気よく言った、

『あのねーっ・・・・麗奈美ちゃん・・・・』

『・・・・?!!』

『あつーーー』めん。いきなり・・・私、大木姫乃。同じクラスだからよろしくねっ。』

『あー。うんっ！…あつーー麗奈美でいいよっ！…』

『じゃー私のこと姫乃で・・・。』

『うんっ！…』

『あつーーそうねっ・・・・麗奈美・・・ちゃん・・あつーー麗奈

美つ・・・・ちや・・・』

『なれてからでもいいよっ！…』

『ごめんね・・・・。あのね・・・・実菜とけんかしてるよね？…』

『・・・・うん・・・・。』

『実菜と仲直りしてあげてほしいんだあー・・・・。』

『えつ？…どうして？…』

あたしは聞いた。

『うん・・・・実菜すーくおちこんでて・・・・。』

『そーなんだあーっ・・・・・・。』

姫乃と話している間にもつ教室の前まできた。

『・・・・じゃあーっ・・・・麗奈美・・・・実菜のこと考えておいて・・・

・』

『う・・・・ん・・・・。』

姫乃は、あたしより先に教室に入つていった。

その後、あたしも入つた。

その日は、授業よりも実菜とのけんかのことを考えてしまつていた・

・・。

その日は、結局結論が出ずそれから1週間が過ぎた。  
ある日、あたしは実菜を呼んだ。

『あのせつ 実菜・・』

『「じめんっ！麗奈美っ！！私が悪かったのっ！！』  
実菜はあたしが言う前に先に言った。

『「実菜っ！！あたしも悪かった・・・」じめん』

## 仲直り

その日の夕方、あたしは実菜と学校の近くにある「パート」の行つた。オソロのキー・ホルダーを買って仲直りの印にした。

『あつ！…麗奈美つ！』

『何づつ？！』

『今日、家にとまつて来なあつ？！』

『まじつ？！行く行くつ！…』

明日は土曜日だし、学校も休みだしつ。

あたしは実菜の家に初めて行つた。

実菜の家は2階建てでフツーの家だった。  
家の中は、すごくキレイにされていた。

実菜の部屋に入ると・・・

机の上には、教科書や問題集がいろいろつんであつて、  
ノートも開いてあり、そこには、数学の問題が何個も解いてあつた。

壁には、コルクボードがかけてあり、写真が付けてあつた。  
その写真には・・・

実菜と男の子が写つている。

『ねえ・・・実菜つ！…この写真に写つている人つて・・・』

『あつ！それね・・・この前できた彼氏つ！…』

『へえ・・・つてかいつかいつかーつ？！』

『うーんつ・・・麗奈美とけんかした日の夕方、私一人で街を歩いていたら

偶然会つて仲良くなつたんだよつ。』

『へえ～…そなうなんだつ・・・名前はつ？！』

『名前つ？！龍飛』

『へえーつ・・・』

と言いながらあたしはもう一度写真を見た。

『麗奈美はつ？！』

『えつ？！』

『いなのつ？！彼氏つ？！』

『あー。うんつ？！いないよつ。』

『そつかあー』

その夜は、実菜とさわぎまくつて氣づけば朝だった。

仲直り2

今日から5月だつ。

今日で入学して約1ヶ月が過ぎた今ではクラスのグループももうできていってはつちゃけ組みとジニアーズつて分かりやすく分かれている・・・。

あにわん

卷之三

『ひつじ？！麗奈美が？！』

¶  
Z  
Z  
Z  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
¶

卷之三

۷۰

『麗奈美つ！！』

『んーつ？！実菜つ？！』

あたしは眠たそうな目を一

あたしは眠たそうな目をこすりながら起きた。あたしが実菜に起こされたのは、夕方だった。

時計には

あかりこかに霜立つかんか

• • • • • ○

『あ、一。』「めん」「めんつーーー。』

あたしはあわてて起きた。

そして、実菜の家を出た。

帰りは、実菜に途中までおくつてもらつた。

『実菜 もういいよつ。ここから1人で帰るから。』

『うん・・・。麗奈美・・・気をつけて帰んなよつ?』

『大丈夫だつて!! ありがとう』

そう言つた後、あたしと実菜は少しだまつてしまつた。

・・・・・。

『私つ・・・麗奈美と仲良くなれて良かつた!! これからも友達で  
いてつ・・・』

実菜が言つた。

『もちだしーつ!!』

あたしはそう言つた。

『明日学校で会おう!!』

『うんつ!! 実菜ありがとう!!』

## 一目惚れ

5月になり、この学校にもなれてきた頃。いつもと変わらない日々を過ごしていた。

あたしが知らない間に実菜と悠里も仲直りをしていた。  
今日は、久しぶりにあたしは早く学校に行つた。

『実菜つ！ 悠里つ！ おはようつ！』

『おはよーつ！』

『おう！ 麗奈美、今日来んの早えーじゃんつ！』

『うんつ！ ！ つてかー 悠里どうしたーつ？！ そのケガ？！』

悠里はひざにケガをしていた。

『あー コレ？！ 昨日のバスケで転んで・・・』

『まじ？！ 大丈夫？！』

『うんつ！ ！ つてかー それより今日かつこいい先輩見つけた！！』

『マジ？！』

『どこで？！』

あたしと実菜は聞いた。

『えつと・・・保健室の所の廊下！！』

『まじーつ？！』

『いいなあーつ！！』

『つてか何年？！』

『多分2年じゃないつ？！ うわばきのラインの色が緑だつたし。』

『2年かーつ！ ！ いいなあー 見たいなあー！！』

『つてかあーつ 2人で歩いていて2人ともかつこ良かつたー！！』

『悠里それまじでー？！』

『うんつ！！』

『何組か分かるー？！』

『さあー 悠里も今日会つたばっかだしつ・・・』

『そつかー！』

『じゃーセー昼休み保健室行かない?』

悠里はあたしと実菜に言った。

『行く行くーつ！』

あたしはそう答えた。

『あれー? ? ! 実業は? ? !』

「じめん！」今田の

二二一

卷之三

二十九

卷之二

二二一

つ  
た。

5分くらい待つていると・・・

『あつ！！来た来たっ！！あの2人だよっ！！麗奈美ーっ♪

『國語』卷之二

アレッ!!

悠里が指摘した方を見た

## 一目惚れ2

『うわっ！－かっこいいーっ！－』

悠里の指差した先にはあたしのタイプの男の人人がいた。

『でしょーっ！－もじかっこいいもんっ！－』

『つてかー悠里どっちがスキ？！』

『悠里はー右の前髪長い人 麗奈美はーつ？－』

『あたし・・・左のウルフで茶パツの人』

『ねえ 麗奈美ー近くまで行つてみようよ』

『うん！行く行くー！－！』

と言つことで階段からおりて来た2人をねらつて  
今日は名前だけを見ようと思つていた。

『悠里っ！－來たよっ！－』

『うん・・・。』

そう言いながらあたしと悠里は廊下を歩いた。

そして・・・すれちがつた。

あたしはすぐドキドキで下をむいてしまつて・・・一瞬だけちゃんと見れた。

『ねえ・・麗奈美っ！－ちゃんと名札見た？！』

『うーん・・・。一瞬だけね・・・。小田つて名字だつた。』

『名前見てないの？！』

『つてかー見れなかつたー。さいやくー！－！』

『悠里は見たよ。ちゃんと 原田 翔つて書いてあつたー。』

『バカかっこいいよね』

『まぢやばいもんっ！－』

『悠里・・・あたし多分・・・あの人に一目惚れした。』

『麗奈美まじー？！あついもかもー。』

そしてあたしと悠里は、その日から恋をした。

毎日毎日わざわざとおらないような場所をとおつてまで  
あの人を見て、クラスも調べたり、そうじ場所も見つけて  
わざわざとおるフリしてガン見したりした。

そんなあたしと悠里の行動はストーカーだった。  
でもあたし達はそれでも良かつた。

あの人を好きな気持ちは誰にも負けないから。

毎日毎日楽しい日々が続いた。

毎日学校に来るのがあの人を見に来るようなモノだった。  
そして気づけばもう明日から夏休み。

### 一田惚れ③

『おい麗奈美ーーー！そういういえば麗奈美の好きな人・・・小田だっけ？！』

と、そう言つたのは悠里だった。

『うん。』

『その人男バスだよ部活。悠里女バスで体育館で練習した時見たぜつ。』

『まちー？！いいなーつー！何でもっと早く教えてくれないの？！』

『あーわりーわりーつー！－！そういういえば名前が龍飛りゅうとだよ。その人つ！！』

『龍飛？！・・・？！小田龍飛・・・超かっこいいつー！』

『悠里つありがとう教えてくれてつー！－！』

『おうつー！－！』

そしてその日もいつもと同じように好きな人が見れたい日だった。

今日から夏休みになつた。

夏休みは休みなくあたしはバイトを入れた。悠里達にはあまり会わなかつた。

ルルル・・・ルルル・・・

ケータイが鳴つた。

あたしは慌てて電話に出た。

『もしもし』

『あつ！もしもし麗奈美？！悠里だけど・・・』

『悠里？！何が用つ？！』

『今ね、小田先輩と彼女歩いているところ見たよつ』

『えつ・・・・？！』

あたしは、その話を聞いてすぐビックリして、手から

ケータイが床に落ちた。

ショックだった・・・。

『ちょっと・・・麗奈美ーつ?』

あたしはあわててケータイを拾った。

『あつ ごめんっ! ってかーあんなカッコ良い人に彼女いないわけないもんねえー』

『・・・ごめん麗奈美っ。悠里言わない方が良かつたね・・・。』

『そんなことないよつ!! それより悠里の好きな原田先輩は??』

『あー原田先輩・・・彼女いないみたい・・・。かつこいいのに・・・。』

『そーなんだーいいなー。つてか悠里ねらつちやえつ!!』

『うーん・・・でも話したことないしなーつ・・・』

『がんばれ悠里っ!!』

『うんっ! じゃー麗奈美ー小田先輩の彼女が誰か分かつたらまた電話するー。』

『よひしくね。じゃーばいばい。』

そう言って電話をきつた。

あたしはこの日から小田先輩の彼女が気になつて学校に早く行きたくなつた。

学校に行けば小田先輩を見れるし、

もしかしたら彼女と2人話している所を見れるかもしれない。

あたしはただライバルを見てみたかつただけかもしれない・・・。

1日1日が早く終わればいいのにと思つていると長い1日になつて1日が早く終わつてほしくないと思えば1日が早く終わつていつた。そんなころ・・・

ルルル・・・ルルル・・・

ケータイが鳴つた。

ケータイの画面には【実菜】と表示されていた。

どこかなつかしいような気がした。

夏休み入ってまだ一度も会つていなかつたから。

『もしもし？！』

『あつ！もしもし麗奈美？！』

『うんっ！…』

『良かつたあー。やつと麗奈美電話に出てくれた』

『えつ？！』

『だつて麗奈美いつも電話かけると出してくれないじゃんっ・・・。』

『あつ「ごめん…仕事中は出れなこやー』

』

## 一田惚れ4

『仕事？！アルバイトかー！！すごいね麗奈美つ』

『そつかあー？！』

『あつ！…そうそう明日うちの近くで花火大会があるんだよ。一緒に行かないつ？！』

『行く行くー！…』

あたしは迷わず答えた。

『じゃー行こー！…じゃー夕方の4時こじるに私の家に来てくれる？！』

『うん！分かつたー。つてかゆかたで行く？！』

『うん！…じゃーまた明日ねー！…』

『うん。バイバーイ』

電話がきた。

「花火大会かー楽しみだなーっ！！ ゆかた・・・久しぶりに着るなーっ・・・」

そんなことを思いながら1日は早く終わった。

次の日、夏休みの最後の日あたしは昨日実菜と約束した花火大会に行くことになった。

夕方になり、あたしはゆかたに着替えて実菜の家に向かった。

実菜の家に行くと実菜もゆかたに着替えていてすごくかわいいゆかたを着ていた。

『実菜そのゆかたかわいいね～！…』

『似合つてる？！…』

『うん！…』

『ありがとう。麗奈美もかわいいよつ！…』

『そう？！…』

花火大会まで時間があるからあたしと実菜は実菜の家でいろいろ話をした。

あたしは、実菜に気になつていて質問をした。

『そーいえば実菜彼氏いたよね。どうなつた?...』

『あー・・・別れたよ。』

『えつ? ! 何でー? !』

『だつて・・・彼氏には、私のほかに女がいて・・・』

『えつ? ! ウソー? !』

『本当だよつ。』

『実菜・・・ごめんね・・・イヤな話させちゃつて』

『うんん。いいよ 別に。』

そーいえばこの前来た時に見たコルクボードにはつてあった写真はもうはつてない。

『つてかー私の話はもういいの。麗奈美はー恋してる?...』

『・・・うんつ。いちょうね・・・。』

『へえーつ! ! 誰? ! つてかー彼氏ー? !』

『彼氏じゃないよつ! ! 好きな人ね・・・。』

『へえー! ! いいじやんつ! !』

『そう? でもきつと叶わない恋だよつ』

『えつ? ! 何でえー? !』

『だつて先輩だし・・・彼女いるし・・・。』

『へえーそうなんだー・・・でもがんばれ麗奈美つ』

『うんつ! ! がんばるよー! !』

と、2人で恋の話をしていると、時間はどんどんすぎていき、気づけば7時になつていた。

『ねえ実菜! ! もう7時だね』

『えつ? ! ウソー? !』

実菜と話しているといつといつと長話になつて時間を忘れてしまつくりこしゃべつて盛り上がる。

『じゃー麗奈美ー花火見に行こひー! !』

『うん! !』

2人で花火がキレイに見えて出店がでている商店街に行つた。

ヒュー ドカン・・・

ヒュー ドカン・・・

ちょうど商店街についた時花火が上がった。

『うわーー！きれいーー！見た？見たーー？！』

『うんーー！見たーー！』

ヒュー ドカン・・・

『次はすご~く大きいのだよつーー実菜つーー』

『うん。キレイーー！』

あたしは、実菜と花火を見ながら出店も見ながら歩いた。

出店は、いろいろあつて食べ物もいろいろ売っていた。

『ねえ麗奈美つーー！チヨ「バナナ食べようーー』

『うんーー食べるーー！』

あたしと実菜はチョコバナナを食べた後、クレープやりんごあめ、パイナップル、たこ焼きを食べた。

そして、オソロのお面を買って2人でつけた。

帰る時、わたがしを買って2人で食べて実菜の家に戻った。実菜の家についた時はもう8時半だった。

あたしは急いで実菜の家を出た。

『実菜ーーー！めん電車で帰んなきやなんないから帰るね』

『うん。明日から学校だもんね』

『うんつーー！明日学校で会おう』

『後期もよろしくねー麗奈美』

『うんーー！じゃーばいばーーー！』

今日で楽しかつた長い休みは終わった。



## 夏の終わり

今日から後期が始まった。

9月になつたにもかかわらずまだ暑い日が続いた。

今日は、席がえの日。

くじで席を決めることにした。

『席がえ楽しみだねー！－誰となるのかなー？－』

と後ろの席の実菜が声をかける。

『楽しみだね』

と実菜と話している間にくじの順番がまわってきた。

『次・・・麗奈美ちゃんの番だよつ！－』

と姫乃が言った。

『あー…めんつ…』

あたしは袋に入っている紙を1枚とつた。  
広げてみるとその紙には・・・

5番

と書いてあった。

『麗奈美ー！－何番？！私12番・・・。』

『はあー？－実菜12番つ？！あたし5番…』

『うそーつ？！絶対席遠くなつちやうじやんつ…』

『そこやくー…』

『あつ！－悠里は？－』

『聞いてみるかーつ…』

『悠里ー！－何番だつたー？－』

『悠里はあー6ばーんつ…』

『まひ？！近いよね？！きつと』

『はーいじやーみんな席ついてー！－席の順番は、黒板を見て席を動

かして下さー。』

と高島【担任】が言った。

あたしは黒板を見た。

黒板には、窓側から男女別、1～6番、7～12番、13～…と書いてあった。

あたしは悠里と同じ班になれた。

あたしが悠里の前の席。

実菜は姫乃と同じ班になった。

そして今日からまた小田先輩と原田先輩が見れる。あたしは、すぐくウキウキの気分だつたが・・・もしも偶然小田先輩の彼女を見てしまつたらあたしはどうなるのかすく怖くて少し見たくない気もあつた。『麗奈美つ！ちょっと職員室行くんだけど行く？』

『うん！じゃーついてくー』

あたしは、休み時間悠里と一緒に職員室に行くことにした。

『悠里ー職員室に何しに行くの？！』

『出し忘れのプリント出しに行くの？！』

『プリント？！何かあつたつけ？』

『英語のつ！？』

『英語のプリントなんか宿題にあつたつけ？！』

『あつたしイー！麗奈美忘れてるーつ！？』

『まア・・・いっよつ！？そのつち思ひ出すやうーつ！？』

『あはは・・・。』

と話していくらもう職員室の前まで來た。

『失礼します。』

悠里は職員室に入つていった。

あたしは職員室の前で待つていた。

その時、小田先輩と彼女を見た。

2人でならんで廊下を歩いていた。

やつぱりショックが大きかつた。

見なきやよかつたなあ・・・。

小田先輩と彼女が仲良く話していた時、あたしは小田先輩と

目が合つてしまつた。  
ヤバイ・・・ガン見しすぎた・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9268c/>

---

;\*: にじ ;\*:

2010年12月11日15時12分発行